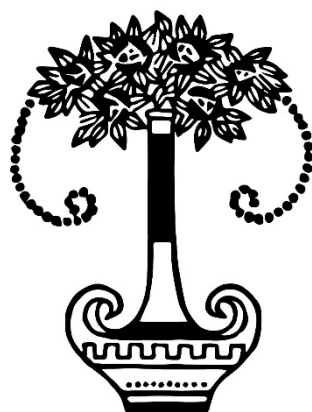


(一財) 東京ジャーミイ文書館 第1回シンポジウム
「東の果てのイスラーム」予稿集

会期：令和5年11月3日（金） ～ 11月5日（日）

会場：東京ジャーミイ・ディヤナト トルコ文化センター

東京都渋谷区大山町1-19



概要

概要

名称：第1回 東京ジャーミイ文書館シンポジウム 「東の果てのイスラーム」

会期：令和5年11月3日 ～ 11月5日

会場：東京ジャーミイ・ディヤナト トルコ文化センター

東京都渋谷区大山町 1-19

地上でのイスラームの拡大はとどまることなく、アフリカ、ヨーロッパ、そしてアジアにも到達しました。知る人は知るとおり、その範囲は非常に広く、イスラームはその「イスラームらしさ」を保ちつつ地域ごとの文化と調和しながらユニークな発展を遂げており、それはここ日本も例外ではありません。そこで東京ジャーミイ文書館の記念すべき第1回シンポジウムは「東の果てのイスラーム」と題し、「極東」日本を舞台として以下の課題を追求したいと考えます。

募集課題：

- (1) クルアーンならびにその翻訳および研究
- (2) ハディースならびに古典の翻訳および研究
- (3) イスラームと現代社会
- (4) 「日本×イスラーム」

お問い合わせ先

(一財) 東京ジャーミイ文書館 第1回シンポジウム運営事務局

〒151-0065 東京都渋谷区大山町 1-19 3F

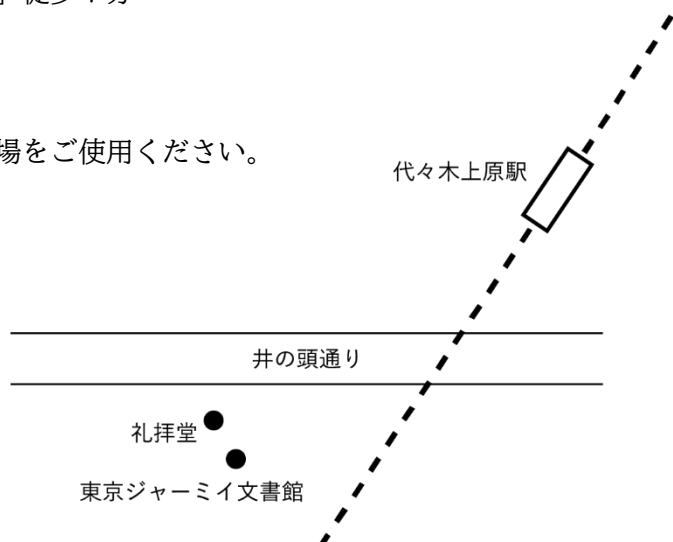
E-mail: institute@tokyocamii.org

会場アクセス

小田急線・東京メトロ千代田線「代々木上原駅」徒歩7分

駐車場はありません。

公共機関をご利用いただくか、近隣の有料駐車場をご使用ください。



日程・時間割

日程・時間割

1日目(11月3日) 開会式・レセプション

- 来賓挨拶 コルクット・ギュンゲン(駐日トルコ共和国大使)
 セリム・アルグン(トルコ共和国宗務庁 副長官)
 秋葉 淳(東京大学 東洋文化研究所 西アジア研究部門 教授)
基調講演 鈴木 董(東京大学 名誉教授)

2日目(11月4日) 発表

10:30~	水谷 周	「現代日本における宗教信仰復興とイスラーム」
11:20~	瀧口 咲良	「在日トルコ人の日本社会への適応とイスラーム教育に対する意識と実践—トルコ人男性と日本人女性の国際結婚の事例から」
12:10~		
13:00~	厚地 光優	「戦前日本における「ラーレ」文化の受容 トルコ、イランの視覚表象を中心に」
14:00~	村山 木乃実	「『精神的マスナヴィー』にみるルーミーのクルアーン解釈」
14:50~	平野 貴大	「クルアーンにおける啓典の民」
15:40~	Halil Ibrahim Senavcu	「イスラーム・スーフィズムと日本仏教の類似性は 共存文化に貢献しうるか」
16:30~	メルベ ウステキ	「卑弥呼とラーズィエ・ベギュム・スルタン： 日本人とイスラーム教徒の女性統治者の類似点」

3日目(11月5日) 発表

10:30~	ハディ ハーニ	「ムスリム・シオニスト」の言説分析：ムスリムによる パレスチナ問題理解の諸相」
11:20~	山本 ラニア	「在日ムスリム青年を対象とした自叙写真法による自己理解と 自己表現」
12:10~		
13:00~	兼定 愛	「フズン(悲しみ)の原因・対応・結果に関するクルアーン解釈学 的検討：古典期から近現代にかけてのスナ派の解釈の概観」
14:00~	前野 直樹	「ハディースの日本語訳と今後の課題」
14:50~	智野 豊彦	「安心して学べるムスリムと公立高等学校の関係づくり」
15:40~	アルマンスール アフ マド	「インターネット時代のハディース伝承」
16:30~	松本 高明	「大学入試問題に見る学歴社会と「負のイスラーム像」の関係」

(一財) 東京ジャーミイ文書館 第1回シンポジウム「東の果てのイスラーム」予稿集

日程・時間割

現代日本における宗教信仰復興とイスラーム
Revival of Religious Belief and Islam in Contemporary Japan

アミン水谷 周 一般社団法人日本宗教信仰復興会議理事長
Amin Makoto MIZUTANI President, Congress for Reviving Religious Belief in Japan

現代日本は宗教離れがはなはだしい。まず戦後 70 年を生きて来た人間として、特に若い人たちに向けて、同期間を振り返りいくつかの現象を指摘する。またこの宗教離れは世界的にも特殊な状況であることを説明する。

- ・戦前の国家神道支配への反省
- ・徹底した政教分離政策
- ・「神々のラッシュアワー」といわれた 50 年代～60 年代の現世利益追求型新宗教の勃興
- ・オウム真理教など過激な現象
- ・宗教の政治介入に指針が不透明で、宗教にどう向き合のかという戸惑い

宗教離れは、社会的なひずみと人間疎外の原因となっていること

- ・自殺者が多数出ること
- ・生きがいを求める話題の多いこと
- ・道徳観念の弱体化
- ・人生の最後に近づいても人の心は千々に乱れること
- ・人道支援の功績などへの宗教界からの称賛がない

一方、大災害など、「悲」の拡大と宗教回帰の兆候も顕著。本来宗教行事への参加は、神々しく、また晴れ晴れしいものだが、現状は気恥ずかしい印象という真逆の様相がある。特殊な現代日本の宗教アレルギーを治癒することは、今後の日本の根本課題である。それは本来の人間復興でもある。信仰は個人的な面もあるが、日本社会としては、ここにイスラームの役割がある。そのいくつかを列記する。

- ・新しい人生観の導入—死生観、生きがい、安寧、看取り、共同体意識など
- ・新しい思考の枠組み—国際的視野、繰り返し論法、縁起より因果関係、情緒より論理性など

在日トルコ人の日本社会への適応とイスラーム教育に対する意識と実践

トルコ人男性と日本人女性の国際結婚の事例から

Adaptation of Turks in Japan to Japanese Society and Consciousness and Practice of Islamic Education

- A case study of international marriage between a Turkish man and a Japanese woman -

瀧口 咲良 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 博士前期課程2年
Sakura TAKIGUCHI Master Course,
Graduate School of Education and Human Development,
Nagoya University

本研究では、在日トルコ人の国際結婚家庭を対象として、彼らの日本社会への適応とイスラーム教育に対する意識と実践の様子を明らかにすることを目的とする。

80年代以降、外国人労働者として来日した在日ムスリムは日本へ定住し、今ではそのコミュニティは第二世代、第三世代まで広がっている。これまでの在日ムスリム研究で取り上げられてきたパキスタン人をはじめとするムスリム外国人労働者は、定住化の過程の中で日本人女性と結婚する者も多い。先行研究として、ムスリム外国人労働者との結婚を機に改宗ムスリムとなった日本人女性たちの複層的なアイデンティティについての研究(工藤、2008)、彼らの子どもであるムスリム第二世代の学校生活やムスリム・アイデンティティ(クレシ、2021)に関する研究などが挙げられる。トルコは多くの国民を外国人労働者としてヨーロッパへと送り出してきた国であるが、1990年代後半からは新しい出稼ぎ先として日本が加わり、以降在日トルコ人人口は増加傾向にある。本研究では比較的新しい在日ムスリムコミュニティの一つであるトルコ人コミュニティと国際結婚家庭を取り上げ、日本社会への適応と子どものイスラーム教育に対する考えや取り組みを明らかにする。

調査方法はまず、トルコ人男性と結婚した日本人女性を対象に、子どものイスラーム教育の取り組みとその背景にある考えについてインタビューを行った。加えて、モスクでの子ども向けのクルアーン教室、宗教行事などでの参与観察も行った。

調査から、イスラーム教育は家庭内外で行われ、コミュニティの存在も大きな資源となっていることが明らかとなった。また、子どもにイスラーム教育を行うことをどの程度重視するかは、夫であり父親であるトルコ人男性よりも、妻であり母親である日本人女性のイスラームに関する考えがより反映される場合があった。さらに、彼女たちが日本社会でムスリムとして子どもを育てることへの模索が見られた。

戦前日本における「ラーレ」文化の受容

トルコ、イランのラーレ視覚表象を中心に

Adoption of "Lale" culture in Pre-war Japan

: Focusing on the Visual Representation of Lale in Türkiye and Iran

厚地 光優

鹿児島大学法文学部人文学科 4年

Miyu ATSUCHI

Senior Grade, Faculty of Law, Economics and Humanities,
Kagoshima University

トルコ、そしてイランにおいて主要なモチーフの1つである「ラーレ(チューリップ)」について、それは日本へどのように受容されたのか。

本シンポジウムでは、その主な焦点を明治～昭和初期に絞り、調査結果を発表する。また、後述の通り、日本におけるラーレモチーフの受容は、戦前と戦後とでその様相が異なる。その比較と理由についても示唆を出したい。

さて、トルコおよびイランのいわば伝統的モチーフであるラーレは、古くより絨毯や陶器、絵画、モスクや宮殿といった視覚世界で用いられてきた。さらにラーレは、その綴字や色彩に神性を帯びることから、詩の世界においても盛んに用いられる。このように、当該文化圏のラーレというモチーフは、その芸術領域を横断しながら、今日に至るまでさまざまなかたちで描かれてきた。

ところで、日本の本格的なイスラーム受容であるが、その始まりは明治時代といわれている。この時代におけるイスラーム美術および建築の紹介者には伊東忠太(1867-1954)がいるが、ペルシアやトルコの美術・建築の受容もまた、彼の事業が中心であったようだ。しかし、伊東の事業はしばらく後継ぎをみず、明治～戦前の日本における中東・イスラーム研究自体もまた、その「知の蓄積」がうまく継承されなかった。その後日本のイスラーム研究がふたたび盛んになるのは、1950年代半ば以降のことである。

上述の背景のもと、この地域におけるラーレのモチーフは日本において、断絶されながらも二度——「第一世代」の時代に活躍した美術批評家と、その後の「第二世代」の研究者によって——繰り返し受容された。本シンポジウムでは、大隅為三(1881-1961)、森口多里(1892-1984)、ヤマンラール水野美奈子(1944-)らの言説を取り上げ、比較することで、日本におけるラーレ表象受容の様相、その「過去」と「現在」を掘り上げる。比較からは、芸術に対する「情緒的な取り上げ方」と「知性的な取り上げ方」の狭間をゆれ動き、時代ごとに異なる姿で日本にあらわれた「ラーレ」表象の像が明らかになる。

『精神的マスナヴィー』にみるルーミーのクルアーン解釈

Rumi's Interpretation of the Qur'an in " *Maṣnavī* "

村山 木乃実

日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学)

Konomi MURAYAMA

JSPS Research Fellowship for Young Scientists, PD,
University of Tokyo

本発表では、イスラーム世界を代表する神秘主義詩人、ジャラールッディーン・ルーミー (Jalāl al-Dīn Muḥammad al-Balkhī al-Rūmī, 1207-1273) の神秘主義叙事詩集成『精神的マスナヴィー』 (*Maṣnavī-ye ma'navī*) とクルアーンの関係を検討する。『精神的マスナヴィー』の土台となるのは、アラビア語のコーランの章句や、預言者ムハンマドの言行録「ハディース」である。そのため、十五世紀のペルシア詩人ジャーミー (Nūr al-Dīn 'Abd al-Raḥmān ibn Aḥmad Jāmī, 1414-1492) が、『精神的マスナヴィー』を「ペルシア語のコーラン」と呼んだのは有名な話である。

ルーミーのクルアーン解釈をめぐっては、これまで『精神的マスナヴィー』とクルアーンの間テキスト性や、具体的にクルアーンのどの章句が『精神的マスナヴィー』のどの詩に反映されているのかを検討した研究、アレゴリー研究、物語の比較研究などがある。本発表では、先行研究とりわけクルアーンと『精神的マスナヴィー』の関連を詳細に検討したカーゼム・アフマディー著『ルーミーとクルアーンの章の翻訳』 (*Mowlāna va tarjome-ye āyāt-e Qurān*) を踏まえ、ルーミーがクルアーンをどのように解釈し、それを「ペルシア語のクルアーン」とも称される『精神的マスナヴィー』でいかに表現しているのかを明らかにする。発表では、『精神的マスナヴィー』には、クルアーンに影響を受けていながらも、そこにルーミーの独自の解釈がみられる章句があることも指摘する。

クルアーンにおける啓典の民

People of the Book in the Quran

平野 貴大

東京大学東洋文化研究所 特任研究員

Takahiro HIRANO

Project Researcher, Institute for Advanced Studies on Asia,
The University of Tokyo

本発表はクルアーン（もしくはクルアーン解釈書）における啓典の民の位置付けをまとめるものである。また、本発表は龍谷大学指定研究「異文化理解と多文化共生—仏教・キリスト教・イスラームの実践的対話に向けた比較宗教学」の研究の一貫である。この指定研究は異なる宗教の共存的对話の可能性を考察するものであり、応募者の発表ではイスラームの他宗教観を解明する研究の一環として、啓典の民に関する議論を分析する。

クルアーンにおける「啓典の民 (ahl al-kitāb)」とは神から啓示の書物を与えられた民を指し、ユダヤ教徒、キリスト教徒を指す。加えて、クルアーンの中では実態のよくわかっていないサービア教徒も啓典の民に加えられる。しかしながら、これら3つの集団以外にもイスラーム世界の中で他の多神教的宗教の信徒（ゾロアスター教徒や仏教徒）も共存してきた。彼らはイスラームの中で必ずしも排除されるものではなく、啓典の民に準ずるような位置付けが為されることもある。クルアーン解釈や神学・法学においては、ゾロアスター教徒もまた「啓典の民」として扱ったり、「準啓典の民 (man la-hu sibh al-kitāb)」と呼んだりすることもある。また、ゾロアスター教徒を「啓典の民」と呼ぶ場合にも、ユダヤ教徒・キリスト教徒とは異なる判断を下すこともある。

イスラーム思想における啓典の民の位置付けに関する研究は古くから成されてきた。最近でも Bar-Asher, *Jews and the Qur'an* (2021) が出版されたように、これは現在まで進行中の課題でもある。そこで、本発表はクルアーンの記述をまとめるとともに、その解釈を中心的に分析する。そして、ユダヤ・キリスト教徒についてのクルアーンの記述と規定、および、「準啓典の民」に対するクルアーンの記述と神学（分派学）・法学上の位置付けを考察する。これを通じて、クルアーンにおける広義の啓典の民の記述とその解釈、そこから派生する教義・規定を明らかにすることを目指す。

Can the Similarities of Islamic Sufism and Japanese Buddhism

Contribute to the Culture of Coexistence?

イスラーム・スーフィズムと日本仏教の類似性は共存文化に貢献しうるか

Halil İbrahim ŞENAVCU Associate Professor, İzmir Katip Çelebi University

An examination is being conducted to explore the potential contributions of the similarities between Islamic Sufism and Japanese Buddhism to the culture of coexistence. Buddhism is widely practiced in Japan, where it has been adopted with unique interpretations, resulting in the emergence of various sects. Major sects such as Zen Buddhism, Pure Land Buddhism (Jodo), and Nichiren Buddhism are widely followed in Japan. While these sects share significant similarities and parallels, observing their differences and conflicting views is also possible.

There are several similarities between Islamic Sufism and Japanese Buddhist sects. For example, notable similarities can be found between Zen Buddhism and Islamic Sufism. Both traditions emphasize attaining inner enlightenment, known as "satori" or "fana fillah," a transcendent experience. Additionally, both traditions encourage practices of minimal speech, eating, sleeping, and material possessions. Concepts of self-abandonment and renunciation of worldly desires are also significant in both traditions.

Similarities can also be observed between Pure Land Buddhism (Jodo) and Islamic Sufism. In Pure Land Buddhism, salvation is believed to be dependent on the divine power of Amida Buddha. Chanting the name of Amida Buddha keeps one away from evil deeds and leads to salvation. Similarly, in Islamic Sufism, the remembrance of Allah's names keeps one away from evil deeds and serves as a means to attain paradise. Moreover, while Pure Land Buddhism considers Amida Buddha the "Infinite Light," Islamic Sufism teaches that Allah is the "Infinite Light." Followers of both traditions aim to attain salvation through devotion to this divine power.

The similarities between Islamic Sufism and Japanese Buddhism can contribute to a culture of coexistence. Firstly, these similarities promote an understanding and acceptance of different religious beliefs and cultural practices. Focusing on commonalities makes people more inclined to understand and accept one another, which can establish stronger relationships between communities.

Secondly, these similarities can create a dialogue environment based on respect, tolerance, and collaboration. Exploring and sharing the common values of Islamic Sufism and Japanese Buddhism can enhance cultural interaction and foster greater understanding and harmony among people.

Additionally, the similar thought systems of Islamic Sufism and Japanese Buddhism support individuals in pursuing inner peace and happiness. The teachings of both traditions focus on reducing attachment to worldly possessions, overcoming ego, and abandoning worldly desires. This can help individuals adopt a simpler lifestyle and attain inner balance.

In conclusion, the similarities between Islamic Sufism and Japanese Buddhism can positively contribute to a culture of coexistence. By promoting values such as tolerance, understanding, collaboration, and inner peace, these similarities can help establish stronger relationships between communities. People can create a more profound cultural exchange and dialogue by discovering and sharing commonalities. This, in turn, can foster a more inclusive culture of coexistence, where societies better understand and empathize with one another.

Queen Himiko and Raziye Begum Sultan:
Similarities Between Japanese and Muslim Female Rulers

卑弥呼とラーズィエ・ベギュム・スルタン：
日本人とイスラーム教徒の女性統治者の類似点

Merve Ustek Ph.D. Student, Izmir Katip Celebi University

Queen Himiko, a political ruler who inherited the reigns of an ancient city-state in Japan, and Raziye Begum, the first Muslim Turkish state to lead India in the 13th century as a Female Ruler, are significant historical figures. Queen Himiko inherited the reigns of an ancient city-state and founded a kingdom based on mythological and religious elements. She strengthened her leadership by establishing close ties with those who prepared it and other federal heads of state.

Raziye Begum Sultan adopted a more formal form of government in the Turkish Sultanate of Delhi, adhering to Turkish tradition and Islamic law. She fulfilled military and religious authority, legal and administrative duties, and applied Islamic law to maintain social order and regulate relations with people from different regions of India.

Himiko's rule was based on the Japanese feudal structure, while Raziye Begum Sultan had more centralized power in the Delhi Sultanate. The rise of Queen Himiko as a religious and political leader of that time is remarkable, as women's political role was still limited despite the large number of female shamans in Japan in the 3rd century.

The presence of female leaders like Queen Himiko and Raziye Begum Sultan has shown that women have been effective in leadership roles in both societies throughout history and can make significant contributions to their respective communities. Traditional Japanese beliefs believe that women leaders also have an influential role in management. In contrast, conventional Turkish culture and social structure allow women to be elected to religious and political leadership positions.

In conclusion, the stories of Queen Himiko and Raziye Begum Sultan hold an important place in history for their contributions to social change and transformation.

「ムスリム・シオニスト」の言説分析：ムスリムによるパレスチナ問題理解の諸相

Discourse Analysis of "Muslim Zionists":

Aspects of Muslims' Understanding of the Israeli-Palestinian Conflict

ハディ ハーニ 明治大学商学部 特任講師

Hani ABDELHADI Senior Assistant Professor, School of Commerce, Meiji University

パレスチナ問題に関してとりうる多様な立場の中でも、とりわけ特徴的なのが、近年登場している「ムスリム・シオニスト」という立場である。一般的な紛争理解では、その主要当事者の民族的・宗教的帰属を基準に、「パレスチナ・アラブ・ムスリム」的立場と、「イスラエル・ユダヤ」的立場という主流な対立軸を描くことが知られているが、この把握の方法において「ムスリム・シオニスト」は両立場にまたがる、すなわち自己矛盾を孕む立場と考えられる。本研究ではそれがいかに成立するのかを検討するために、SNS 上に投稿された主要なムスリム・シオニストらによるディスコース（言説）を分析対象として、批判的ディスコース分析の立場から検討を加えた。

その特徴には、第一に重層的な二項対立の構図が存在している点が挙げられる。具体的には「民主主義的で寛容なイスラエルやシオニズム」と「不寛容で暴力的な主流なアラブ・イスラーム世界」という二項対立、および「穏健で非暴力的な真のイスラーム」と「過激で暴力的な偽りのイスラーム」という二項対立である。加えて特徴的なのは、内集団において何らかの問題点を自覚することが、外集団の支持に転化するという二者択一的かつ短絡的な論理が存在する点である。このような論理の正当化は、紛争の歴史や、双方の紛争当事者に対する抑圧や暴力の構造についての客観的な評価ではなく、個人的かつ限定的な経験の中で形作られた確信に基づいている。

このような二項対立・二者択一的論理は、ムスリムがパレスチナ問題に対して取り得る、あるいはその規範的原則に照らしてとるべき立場についての認識論上の示唆について指摘する。

在日ムスリム青年を対象とした自叙写真法による自己理解と自己表現

Self-Understanding and Self-expression

Using the Method of Auto-Photography for Muslim Youth Living in Japan

山本 ラニア

多文化間精神医学会 臨床心理士・公認心理師

Rania YAMAMOTO

Clinical psychologist / Certified Public Psychologist,

Japanese Society of Transcultural Psychiatry

自叙写真法 (method of auto-photography) とは、「自分が誰であるか」という写真を撮影し、撮影者が自己と環境をどのように捉えているか理解する手法である。自叙写真法を提唱した Ziller (1990) は、個人が注目した “志向性 (orientation)” を知ることは撮影者の自己を理解することに繋がるとした。また、自叙写真法は、異文化間調査に適しているといわれている (Mustafa, 2014)。そこで本研究は、社会生活と信仰生活の間で揺れ動く複雑なアイデンティティの葛藤を抱える在日ムスリム青年に着目し、自叙写真法による自己理解と自己表現のプロセスを分析することで、アイデンティティの葛藤を軽減する一助となるような心理的体験を導き出すことを目的とし実施された。

方法として質問紙調査と半構造化検査を行い、M-GTA を援用して分析・考察を行った。その結果、【問題の直面化】【過去の振り返り】【大切な人との関係を再認識】【社会的アイデンティティの表出】【自己表現の展開】【自己理解へのステップ】【自叙写真法がもたらした変化】という 7 つのプロセスが生じ、最終的に、アイデンティティの葛藤を抱えながらも肯定的側面だけでなく否定的側面も含んだ包括的な自己受容という〈ありのままの自己の受容〉という心理的体験に到達するということが明らかとなった。つまり、自叙写真法は複雑なアイデンティティの葛藤を完全に解消はしないものの、葛藤を軽減する一助になると考えられた。

被写体によるカテゴリー分類では、「家族カテゴリー」「宗教カテゴリー」に分類される写真も多く見られたことから、ムスリム家族の強い結びつきや、英国ムスリム青年を対象とした研究 (Mustafa, 2014) と同様に、宗教的なアイデンティティは在日ムスリム青年にとって根幹を成すものであると考えられた。本研究では、研究協力者が写真を題材に自己について客観的に語ることで、自身のあり様を再認識し、自己意識が変わっていったと考えられる。研究者が研究協力者と共に写真を眺めながらインタビューを行い、語りを丁寧に拾うことは、臨床の基本的姿勢にも通じることから、この手法が研究協力者の自己理解に寄与する可能性が見出された。

フズン(悲しみ)の原因・対応・結果に関するクルアーン解釈学的検討:

古典期から近現代にかけてのスナ派的解釈の概観

Qur'anic Exegetical Study on the Causes, Responses, and Consequences of Ḥuzn (Sadness):

Overview of Sunni Interpretations from the Classical Period to the Modern Era

兼定 愛

慶應義塾大学環境情報学部 講師(非常勤)

Megumi KENJO

Part-time Lecturer, Faculty of Environment and Information Studies,

Keio University

アラビア語における「フズン」とは、悲しみや悲嘆などと訳される語であり、その派生形を合わせると、クルアーンに計42回登場する。そのうち9回は「ラー・タフザン(悲しむな)」という表現で、文法的には否定命令形(禁止表現)である。そのため、フズンを抱くこと自体が、アッラーからの懲罰対象になると理解される場合がある。

本稿ではまず、該当する章句に特化した解釈研究が十分に行われないうちに、フズンとの向き合い方に関する否定的な理解が広まることの危険性について指摘する。その上で、イスラーム世界で広く信頼される情報源である古典期から近現代までのクルアーン解釈学者らによる議論に立ち戻り、精緻な文献調査を通して、スナ派の伝統的な解釈学的視点を整理して提示することを目的とする。具体的には、「フズン自体がアッラーによる懲罰対象になり得るか」というリサーチクエスションのもと、クルアーン9章40節の「ラー・タフザン」という章句の解釈について、現代において学問的価値が認められている9世紀以降の主要な解釈書群を対象に、フズンの原因、フズンへの対応、フズンの結果という三つの視点から分析する。

結論としては、次の二点を指摘する。第一に、スナ派の伝統的解釈に基づく限り、フズン自体がアッラーによる懲罰対象にはなり得ない。第二に、フズンに対する禁止表現は、フズンが生じることやフズンを抱くこと自体の否定ではない。むしろ、フズンが生じた事実を受容した上で、安らぎを与える存在としてのアッラーを想起することの重要性を喚起するものである。

ハディースの日本語訳と今後の課題

Japanese Translation of Hadeeth and Future Challenges

前野 直樹	日本サウディアラビア協会 / 日本クウェイト協会
Naoki MAENO	Japan-Saudi Arabia Society / Japan-Kuwait Society

本邦でのハディース翻訳は、他言語でのそれと比べて芳しい発展を遂げているとは言い難い。その主な原因は、①商業的ニーズの低さと②ハディース翻訳に携わり得る学問を修めた人材の欠如にあると思われる。とはいえ、日本のムスリム人口は増加の一途を辿っており、日本語を母語とするムスリムも増え続けているため、宗教的なニーズは無視できないと言えよう。

本発表では、今後の展望を描く上での一助とすべく、これまでのハディース翻訳成果を網羅し、翻訳のし直しの必要性有無の検討も含め、今後の課題を論じたい。具体的には、「ハディース六書」のうち日本語に翻訳されている筆頭二書「サヒーフ・アル＝ブハーリー」と「サヒーフ・ムスリム」の一部翻訳内容を吟味したい。前者は非イスラーム教徒によって、後者は三名のイスラーム教徒たちによって翻訳されたという信仰の有無が「知識の伝承という信託」にどれほど忠実であるかの検証が、アラビア語の原文が併記されていないこともあり、当該翻訳についてはこれまでされなかったからである。

また、クルアーンに次ぐ法源とされるハディースの翻訳が今後発展していけば、「テキストの一人歩き」は懸念事項の一つとして挙げられよう。アラビア語の原典に接することのできるアラブ世界ですら、大別して七つあるハディース関連学の一つに過ぎない「出典検証学(Takhreej al-Hadeeth)」に長年従事した一介の研究者を「世紀の大ハディース学者」であるかの如く祀り上げ、ムスリム世界内外に排他主義を伸長させたという歴史的汚点を修正しきれていない。ここでは予防策の一つとして、ハディース伝承学や理解学、ハディース用語学、伝承者評価学などのハディース関連学を紹介すると共に、イスラーム学全体の中での位置付けについても纏めておきたい。

安心して学べるムスリムと公立高等学校の関係づくり
Building Relationships Between Muslims and Public High Schools
Where They Can Learn with Peace of Mind

智野 豊彦

横浜市立高等学校 教諭

Toyohiko CHINO

Teacher, Yokohama Municipal High School

多くのムスリムが日本で生活し、私立だけでなく公立学校にも通学している。ムスリム、ことにムスリマの通学について次のような課題があると一般的に考えられていた。

- ①制服・・制服規定にスカーフやヒジャブなどの着用が抵触する。しかし、多くの公立学校において、LGBTQへの理解などから制服のズボン併用の流れがある。また、異装届を出すことで、ヒジャブなどへの対応は可能である。
- ②食事・・給食のハラール食対応は全国的な課題であるが、多くの高校は弁当で問題は表面化しない。しかし、修学旅行や遠足などでは対応が必要になる。アレルギーと同様に対応することは十分可能である。また、ラマダーン時には、空き教室などの利用は可能である。
- ③礼拝・・稼業中の学校での、ズフル・アスルの礼拝については、会議室や空き教室などを便宜的に礼拝場にすることで対応できる。ただし、ウドゥーは、シャワー室などの使用も考えられるが、使用を聞いたことはない。修学旅行などの課外授業においては別途対応が必要である。また、金曜礼拝の参加は、高校では単位習得が必要で、特定の科目の欠席日数が増えないように、重要な時のみの参加が望ましい。
- ④体育や音楽・・体育や音楽への対応は、ムスリマ個人によって考え方が大きく異なる。水泳など肌の露出が多いスポーツも、「コース選択制」であり必修ではない。また、絶対評価によって生徒に応じたカリキュラムも可能である。ヒジャブを外さず実技が一切できない生徒に対して、見学内容のレポート、準備・片づけなどの作業参加などを評価材料とするなどの対応が可能である。

このように、ハード面では公立学校でのムスリム・ムスリマの受け入れの条件整備は整っている。しかし、ムスリム保護者は学校に不安を抱いている事例も多い。どのような点が問題であるのか、また課題解決に向けて何ができるのかも考えていく。

インターネット時代のハディース伝承

Hadith Tradition in the Age of the Internet

アルマンスール アフマド	慶應義塾大学総合政策学部 訪問講師(招聘)
Ahmad ALMANSOUR	Visiting Assistant Professor (Full-time),
	Faculty of Policy Management, Keio University

イスラーム教徒は早い段階から、使徒(彼の上に平安あれ)および彼の尊厳ある仲間たちの伝承を記録することに興味を抱いていた。この目的のために、クルアーンとスンナが失われ、歪曲される可能性を警戒し、正確な文書化を可能にする新しい科学と特別な技術が創出された。

過去のハディース学者は、ハディースの筆記者が意図せずに発生した可能性のある誤りを識別する能力を持っていた。注釈には、「筆者は誤りを犯した」または「筆者は過誤を犯した」といった表現が頻繁に見られる。しかしながら、近年、多くの個人が筆記者として活動し、その制作物を修正できる学者は限られており、また時間的な制約に悩まされている。これらの学者は主に古典的で厳格に校訂された信頼性のある紙の書籍に依拠するが、一般読者の間に流通する現代の印刷物や電子書籍には注意を払わないためである。

昨今では、発信者および受信者の双方がハディースの正確性に対する注意を怠った状態で、SNSを通じたハディースが広まる現象が増加している。このため、ハディースの使徒(彼の上に平安あれ)への帰属が正確であるかどうかを確認できるウェブサイトやアプリケーションが登場している。ただし、これらのウェブサイトやアプリケーションへの依存度については疑念が残る。なぜなら、これらの現代の筆者はコンピュータで迅速に文章を生成できる一方で、ハディース学の専門知識に欠けることが多いからである。

現代の説教者や研究者の多くが、これらのウェブサイトやアプリケーションに依存しているが、誤りの有無に注意を払っているとはいえない。この状況は、誤りが一般的であるか、ハディースの本質には影響を与えないかのどちらかである。

この研究の目的は、ハディース学に特化したウェブサイトとアプリケーションを検証し、インターネット時代におけるハディース伝承への影響に焦点を当てることである。さらに専門家に対しては、ハディースを正しく伝達するという責務への決意を喚起することを目的としている。

研究にあたり、SNSを介したハディースの伝播に関する一般読者の意見、SNSへの依存度、SNSへの依存度、自分に届く情報への信頼性、およびその他の関連事項についてのアンケート調査が実施された。また、オンライン上の複数のサイトに存在する2つの有名なハディースを追跡し、それらをいくつかの印刷物およびオンラインサイトと比較した。

大学入試問題に見る学歴社会と「負のイスラーム像」の関係

Relationship between Academic Background-Oriented Society and "Negative Image of Islam"
Seen in College Entrance Exam

松本 高明

東京都立駒場高等学校 元教諭

Takaaki MATSUMOTO

Former Teacher, Tokyo Metropolitan Komaba High School

今春まで高校教員であった私は、15年余り前に発表した論文において、日本の高校生の多くが「負のイスラーム像」を抱き、特にイスラームに関する知識が豊富な生徒にその傾向が強いことを示した。そして、巷間流布されるイスラーム情報の偏りがその一因であると考察する一方、今後日本のムスリム人口が増加し、彼らとの日常的接点が増加する環境を学校教育の場で活用できれば、「負のイスラーム像」の是正が進むと期待した。

しかし現在の状況は、当時とあまり変わっていないように感じる。メディアが伝えるイスラームに関する情報の大半は、相変わらず事件性を帯びた、ないしステレオタイプの内容であり、学校教育に関しても、例えば東京ジャーミイを訪れる学生は増加していると想像されるものの、まだ「負のイスラーム像」が是正されつつあるとは言い難い。

この間、校内で主に進路指導を担当し、教科指導では大学入試を念頭に置いた授業が求められる環境にあった私には、思い当たる節があった。大学入試における世界史の問題には「負のイスラーム像」を想起させる表現が繰り返し登場する。大学入試のために作成される参考書や問題集、あるいは大学進学者が多数を占める高校の授業が大学入試問題に追随するのは当然である。

他方、日本の高校教員は必ず大卒以上の学歴保有者であり、報道関係者の多くも大卒者と考えられるので、彼らの大半は必ず大学入試を経験している。もし大学入試問題に「負のイスラーム像」が頻出するならば、受験生はそれに対応した学習を行い、やがて彼らが高校教員や報道関係者となって、今度は自身が「負のイスラーム像」を再生産する、というサイクルが繰り返されるのではないか。そればかりではなく、日本社会の高学歴者全体に「負のイスラーム像」を抱きやすい傾向が見られる可能性もある。

そこで今回は、「負のイスラーム像」を想起させる表現が、大学入試の世界史問題においてどのように現れるのか、「ジハード」および「厳格」という言葉を事例とした報告を予定している。全ての高校世界史教科書に記載されているため、各大学の入試問題にも登場する確率が高く、しかも本来の意味から逸脱し、負のイメージと結びつけられがちな用語だからである。ただしここでの検討は、イスラーム法学上の「定義の正しさ」ではなく、あくまでも大学入試での「取り上げられ方」ととどめたい。また後者に関しては、「厳格な」という形容詞がイスラームにのみ多用される事実を伝えたい。

